

3年学年だより

令和7年1月16日(木)

No.28

吹田市立千里丘中学校

第3学年

一匹のいもむし

1学期に、青凌高校の先生がしてくださった講演を覚えていますか。「一匹のいもむし」のお話です。

一匹のいもむしが、りんごの木に住んでいました。ある嵐の晩、いもむしは、りんごの実ごと吹き飛ばされ、川に落ちてしまいました。いもむしは、りんごの実に乗ったままどんどん下流へと流されていきます。そうして、大きな海にたどりついてしまったとき、彼は思いました。

「ぼくはきっと、この大きな海の上で、魚か鳥に食べられるか、ひからびて死んでしまうんだろうな。」

そう思うと、とても悲しい気持ちになりました。

「でも、今できることをしよう。今日だけ、とりあえず今日だけ、生きてみよう。」

そう決めると、彼は自分の乗っかっているりんごの実を少しずつかじりはじめました。りんごの舟が転覆しないように、バランスをとりながら、ゆっくりと。そして、何日も何日も、海の上をただよいました。

やがてりんごの実は皮一枚残すだけとなりました。あとひとかじりでもしたら、きっと穴があいてりんごの舟は沈んでしまうでしょう。…いもむしは思いました。

「ぼくはがんばったぞ。魚たちにいじめられても、鳥たちにおそわれても、絶対にあきらめたりしなかった。一生懸命に、生きようとしたんだ。ぼくはがんばった…。だから今からぼくができることは、命が尽きるその瞬間まで、あきらめないことだけだろう…。」

そうつぶやくと、いもむしはじっとして動かなくなりました。

数日が過ぎたとき、最後の力をふりしぼって、彼は目をあけました。

「僕はもう死ぬなあ。最後の最後に僕ができることは、僕の大好きだったこのりんごを、おなかいっぱい食べることだ。

そうしてりんごを食べきったら、僕は海の底深く沈んでいくんだな…。」

最後の決意をした彼は、自分の乗っているりんごをかじりはじめました。久しぶりにのどを通る食べ物は、本当に幸せを感じさせてくれました。

そのとたん、大きくぐらぐらとゆれ、バランスをくずしたりんごの舟が、ついに沈み始めました。いもむしは、思わず目を閉じました。

「…あれ？」

ふしぎなことが起きました。目を開けると、いもむしは沈んでいくりんごの舟を、高いところからながめていたのです。ふり向くと、自分の背中には大きくてきれいな羽が風によって動いていました。

いもむしは、一匹の美しい蝶に生まれ変わったのです。

「奇跡が起きた！」と喜びながら、蝶はあのりんごの木へ飛んでいきました。

『一匹のいもむし』(グリム童話より)

この話にこめられた教訓はなんでしょう。

まず一つは、**最後の最後まであきらめてはいけない**、ということですね。これは今のみんなにもあてはまります。入試本番が近づき、思うように勉強が進まなかったり、過去問をやっても目標点が取れなかったり…そんなことが続くと、ついあきらめたくなります。周りがみんな順調にみえて、自分だけが取り残されているような気持ちになったりもします。けれど、結果が出る最後の最後まで、あきらめずに努力を重ねること。それが、成功につながるのです。

そして、このグリム童話には、もう一つ教訓があります。美しい蝶へと変貌を遂げたいもむしは、「奇跡が起きた!」と喜びました。しかし、その変化は奇跡なんかではない、ということです。蝶に姿を変え、危機を脱して生き延びる、という結果に結びつくだけの十分な過程を、いもむしは実行しているからです。

死ぬかもしれないという恐怖、たった一人で戦うという孤独の中、生きる決意したこと。

船となったりんごを、限界まで食べてしっかり栄養をとっていたこと。

魚にいじめられ、鳥におそわれても、あきらめずに戦ったこと。

さなぎになって休養もとり、しっかりと羽化の準備をしていたこと。

その時々において、いもむしは自分にできることを一生懸命考え、全力で取り組んでいました。その結果、蝶へと姿を変えて、生きぬくことができたのです。

その時、自分ができることを全力でやる。ただそのことが、自らを成功へと導く道だ、ということです。

「奇跡」と呼ばれる出来事のほとんどは、「偶然」ではなく「必然」だ、ということです。

受験に立ち向かう3年のみんなにも同じことが言えます。「合格」「勝利」「成功」これらの結果を本気で望むなら、その結果を導くための過程を、全力で積み上げていかなければなりません。

偶然が生み出す奇跡に期待するより、何倍も大変ですが、何倍も可能性が大きくなることは間違いありません。

このお話をしてくださった青凌高校の先生は、こうもおっしゃっていました。

「未来のあなたを決められる神様がいたら、それは現在のあなたです。」

いまはもう、やるしかないね。

